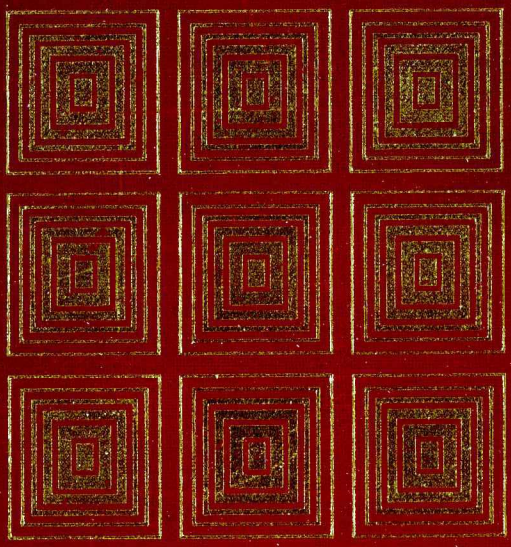
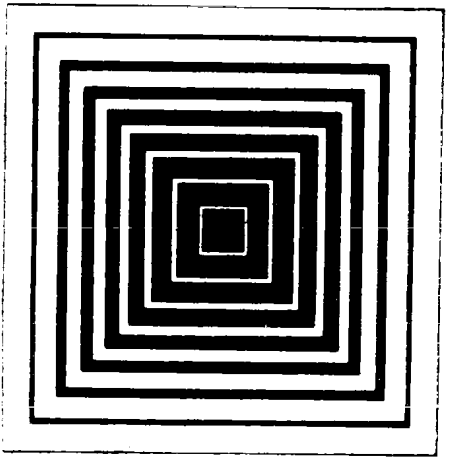


王朝日記随筆集

II

大鏡・方丈記・とわずがたり・徒然草



日本の古典—8

河出書房新社

日本の古典 8

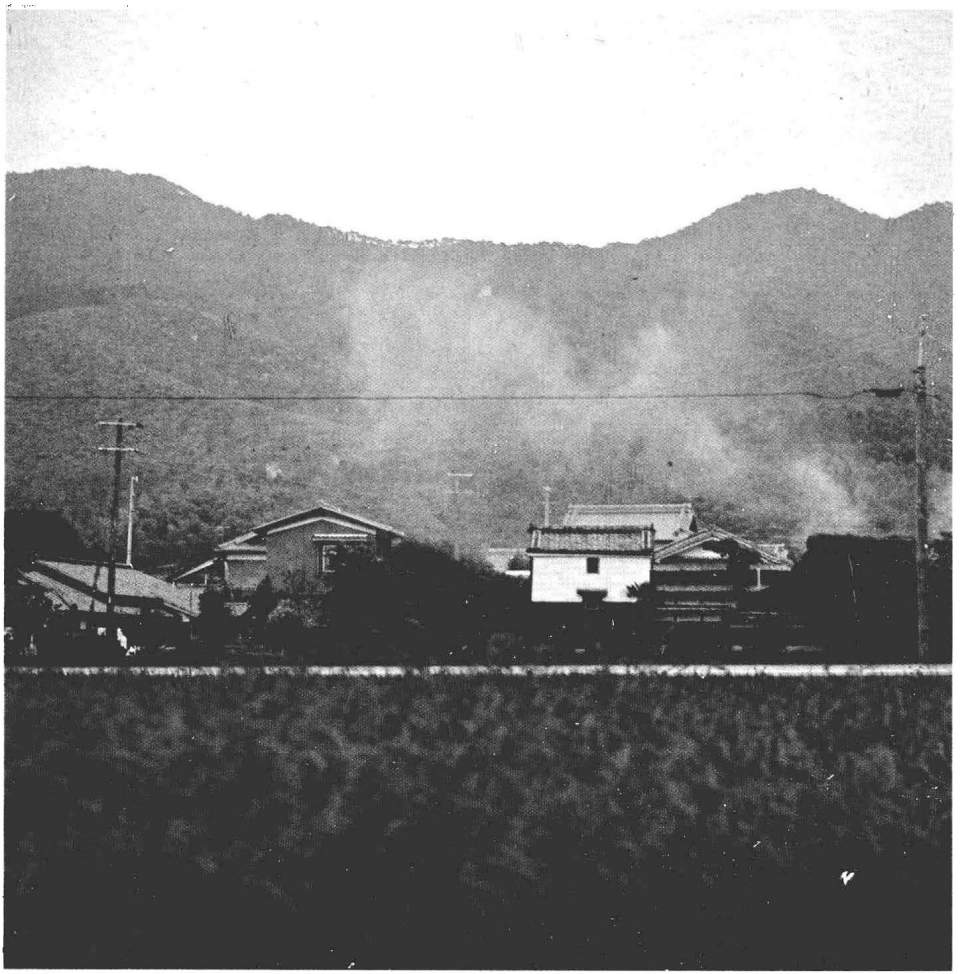
王朝日記随筆集II

昭和四十八年一月 二十日 初版印刷
昭和四十八年一月 三十日 初版発行

訳　者　中村真一郎 他
装幀者　亀倉雄策
発行者　中島隆之
発行所　株式会社河出書房新社
東京都千代田区神田小川町三丁目六番地
電話 東京(292)三七一一(大代表) 振替 東京一〇八〇二

印　刷　凸版印刷株式会社
製　本　加藤製本株式会社
製　函　加藤製函印刷株式会社
本文用紙　本州製紙株式会社
クロス　日本クロス工業株式会社
定　価　一二〇〇円
©1973

0395—334108—0961



京都郊外・日野の里（方丈記）

目次

王朝日記随筆集 II

大鏡……中村真一郎訳 一九

鴨長明 方丈記……佐藤 春夫訳 一三五

二条 とわずがたり……瀬戸内晴美訳 一三五

吉田兼好 徒然草……佐藤 春夫訳 三七

〈作品鑑賞のための古典〉

大石千引 大鏡短観抄

横島昭武 鴨長明方丈記流水抄 間中富士子訳 二六一

松永貞徳 南倶左見草

解説 篠田 一士 三

解題 間中富士子 三二

注釈 池田弥三郎 三三

挿画 大鏡 とわずがたり 向井 久万

方丈記 徒然草 吉岡 堅二

カット 吉岡 堅二

解説写真 榊原 和夫

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

解説

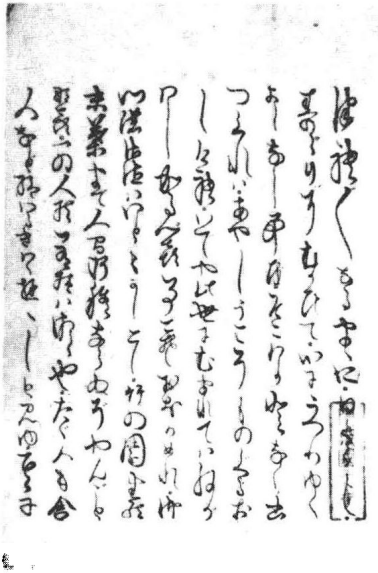
王朝文明の余映

These fragments I have
shored against my ruins.

I

「花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは。雨にむかひて月をこひ、たれこめて春の行衛知らぬも、なほ哀に情ふかし」ではじまる『徒然草』の美学は、すでに耳慣れたものになっているが、これに対して真向から挑戦した本居宣長の激越な駁論も、また、ひとびとのよく知るところである。

とりあえず、まず宣長の意見を心静かに読みかえしてみたい。



「けんかうほうしがつれづれ草に、花はさかりに、月はくまなきをのみ見る物かはとかいへるは、いかにぞや、いにしへの歌どもに、花はさかりなる、月はくまなきを見たるよりも、花のもとには、風をかこち、月の夜は、雲をいとひ、あるひはまちをしむ心づくしをよめるぞ多くて、こゝろ深きも、ことにさる歌におほかるは、みな花はさかりをのどかに見まほしく、月はくまなからむことをおもふ心のせちなるからこそ、さまえあらぬを歎きたるなれ、いづこの歌にかは、花に風をまち、月に雲をねがひたるはあらん、さるをかのほうしがいへるごとくなるは、人の心にさかひたる、後の世のさかしら心の、つくり風流(ミヤビ)にして、まことのみやびごゝろにはあらず、かのほうしがいへる言ども、此たぐひ多し、皆同じ事也、すべてなべての人のねがふ

「徒然草」の筆者・吉田兼好の画像。

「徒然草」写本。烏丸光廣本の上巻巻頭の部分である。

心にたがへるを、雅(ミヤビ)とするは、つくりごとぞおほかりける」

論旨まことに堂々としていて、直心(なほごころ)をもって尊しとした、この大批評家の面目躍如たるものがあり、反論の余地もないように思えるけれども、やはり、ここでの宣長の物言いには、なにかことさらに肩肱張って相手を射すくめようとする気配がないでもない。そう思うのは、ぼくもまた、「後の世のさかしら心の一持主のひとりで、鈴屋大人のように、「すべてなべての人のねがふ心」をひたすら信ずることができなくなっているのかもしれぬ。

こうした鬱した思いに心がかげるとき、たとえば、つぎのような法師の言葉は、いつにもまして、ぼくの思考の動きをかきたててくれる。

「人の心すなほならねば、偽りなきにしもあらず。されども、おのづから、正直の人、などかなからん。己すなほならねど、人の賢を見て羨むは尋常(よつね)なり。至りて愚かなる人は、たま〳〵賢なる人を見て、これを憎む。『大きなる利を得んがために、少しきの利を受けず、偽り飾りて名を立てんとす』と謗る。己が心に違へるによりて、この嘲りをなすにて知りぬ、この人は下愚の性移るべからず、偽りて小利をも辞すべからず、仮(かり)にも賢を学ぶべからず。

狂人の真似とて大路を走らば、則ち狂人なり。悪人の真似とて人を殺さば、悪人なり。驥(き)を学ぶは驥の類ひ、舜を学ぶは舜の徒(ともがら)なり。偽りても賢を学ばんを、賢といふべし」

こういうところにシニックな人間観察を読みとり、その眼ざしのおかしさに憂さをはらし、しばしの興を楽しむこ

上・京都御室の仁和寺五重塔。「徒然草」第五二、五三、五四段などに、仁和寺の法師の逸話が面白おかしく記されている。

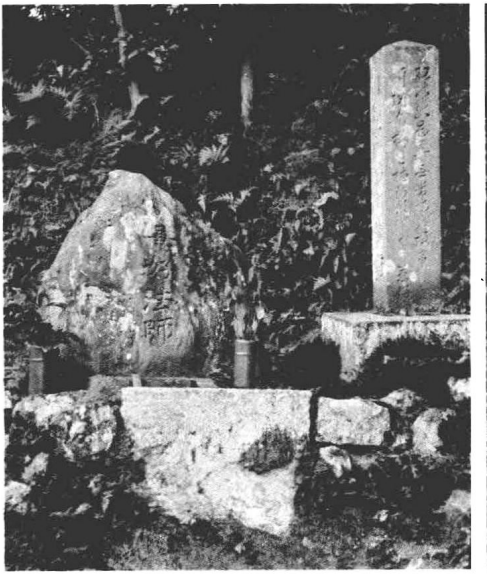
中・仁和寺より双岡をのぞむ。

「御室(仁和寺)に非常に美しい児があったのを、どうかしておびき出して遊ぼうとたくらんだ法師どもがいて、(中略)気のきいた弁当のようなものを、念入りに用意して箱のようなものに入れておいて双岡のぐあいのよさそうなところへ埋め…」(「徒然草」第五四段)

下・男山八幡宮遠望。

「仁和寺のある坊さんが年寄りになるまで男山八幡宮へまだ参詣したことがなかったのでもの足らぬことに思って、ある時、思い立ってただひとり歩いて御参詣した」(「徒然草」第五二段)

男山八幡はこの他にも「とわずがたり」など随所に舞台としてあらわれる。



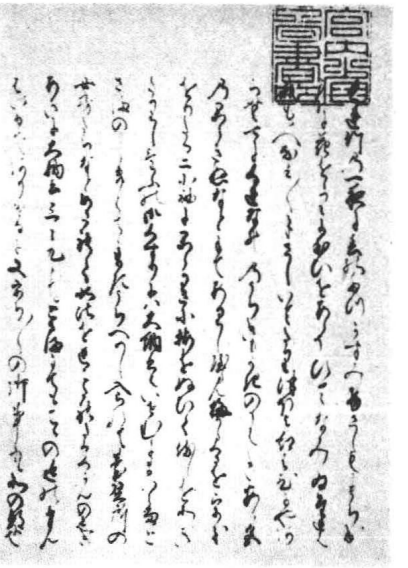
大阪市阿倍野にある兼好法師隠棲の地。『徒然草』が執筆されたのはこの場所である。

兼好の墓。京都・御室の長泉寺境内にある。

とも、あるいは、それを手掛りに、法師そのひとの人柄まであれこれ思いやることも許されるかもしれない。だが、もっと直截に、これを世間道心得の教えとして読者ひとりひとりが身をもって実行する方が、おそらく作者自身の気持に即すことはいうまでもない。

『徒然草』を知慧の書とキャッチフレーズめいた言い方でよぶ習しは、それはそれなりになんら咎めだてするいわれはないが、知慧といい、あるいは、知識というも、当時の意味合いに従えば、それは実行を前提にした厳しい言葉であった。実行者の心理も、意志も無造作に踏みにじってゆくほどの厳しさを存分にもっているのである。「人の心すなほならねば、偽りなきにしもあらず。されども、おのづから正直の人、などかなからん」という書きだしの一節を読んで、そこにシニシズムを見出すのは、そう、フランスの心理小説なんかを読みすぎた文学中毒の読者だろう。そして、そういうひとが「偽りても賢を学ばんを、賢といふべし」という結文をパラドキシカルな人間馴致の処法として、半ばにがい思いをもちながら、なおかつ、このパラドックに興じたまま、書物を閉じ、そこにひめられた実行のはげしい軌跡を読みとることもなく、『徒然草』のシニシズムという通り文句だけをのこしてゆく。

宣長を文学中毒の読者のひとりにかぞえる気はさらさらないけれども、兼好法師を「人の心にさかひたる、後の世のさかしら心の」ひととしたかぎりにおいてはこの日本文学最大最上の批評家も、あきらかに、また、『徒然草』のシニシズムという通り文句を額面通り信用したのである。だから、彼の駁論がどんなに堂々として間然ないものであるにせよ、自分の鳴らす朗々たるアレグロこそが音楽だと信じている人間が、かたえに聴く、内に張りつめた嫋々た



宮内庁書陵部蔵の「とはずがたり」写本。

るアンダンテを指して、これは音楽ではないと断定するようなおおらかなあほらしさがあることは否めようがない。だが、こういう、おおらかなあほらしさというものは並大抵のものではない。ヨーロッパの批評家でも、サミュエル・ジョンスンあたりの大批評家にならないとなかなかできない芸当である。

それはさておき、宣長ともあろうひとが、「もののあはれ」の理法をあれほど深く体得しながら、「雨にむかひて月をこひ、たれこめて春の行衛知らぬも、なほ哀に情ふかし」と説いた中世随一の批評家になぜ心をひらくことができなかったか。

宣長には中世の否定という大命題があった。さらに、そこから儒仏排撃という批判的身振りがクローズアップされてくるわけだが、もちろん、彼の批評の身上はそういう批判や否定にあったのではなく、『古事記伝』の営々不抜のフィロロギーの土壌のうえに花ひらいた『源氏物語』批評にこそ認められるべきである。すなわち、上代から王朝にかけての神典、文学を、彼はわが言霊の道の基本、つまり最高のものとみなしていたのである。

『徒然草』には、過ぎ去った王朝文明の光耀の余映がたなびき、その変化自在な光りの屈折によって、あるときは、たとえようもなくなつかしく、また、あるときは、にがい思いをひそかに嚙みしめながら、さらに、また別のときには、王朝回顧の記述の無表情さにどう応対していいか途方に暮れるというのが今日の読者の率直な反応であろう。第十四段は「和歌こそなほをかしきものなれ」と書きだし、歌の道の不変を信じながらも、やはり古今の相違、なかんずく当世の歌は品下り、古歌はよろしいとする、兼好にしてはめずらしくノスタルジックな姿勢がいささかあらわにすぎた文章だが、その一節にこういう部分がある。

「新古今には『のこる松さへ峰にさびしき』といへる歌をぞいふなるは、まことに、少しくだけたるすがたにもや見ゆらん。されどこの歌も、衆議判の時、よろしきよし沙汰ありて、後にも特更(ことさら)に感じ、仰せ下されける由、家長が日記には書けり」

兼好がどの伝本によって『新古今』を読んだかは知るよしもないが、かりに元久本だとすれば、その成立年代は一二〇五年ということで、彼が『徒然草』の筆をとりはじめた十四世紀半ばちかく、くわしくいえば一三三〇年には、『新古今』の世界も、彼の耳にはもう縁遠いものとなり、むしろ、四百年もむかしの王朝文学の妙えなる和音の残響のようにきこえていたようである。

今日のわれわれは『新古今』をわが中世文学の基調を定

めた空前絶後の大文学だと考えている。そういう文学史的思考は少しも誤っていないと思うが、この『新古今』の影の下に、現実の中世を百年遅れて生き抜いたかのようにみえる『徒然草』の批評家にとって、この『新古今』の世界はかならずしも身近かなものではなかった。事実、元久から元徳にかけての百二十年ばかりの間、時間の流れはすさまじい速度ときびしい様相を呈した。承久の乱のあと、鎌倉幕府の新体制は一応確立したものの、まもなく、二度の元寇を受け、すでに正中の変を経て、兼好が『新古今』の「少しくだけたるすがた」をうとましく感じながらも、やはり、そこに、当世風とはちがった王朝以来の「きよげな姿」のあとを偲んでいるとき、彼の目には元弘の乱から建武中興にかけての世情の動きがはっきり見えていたはずである。

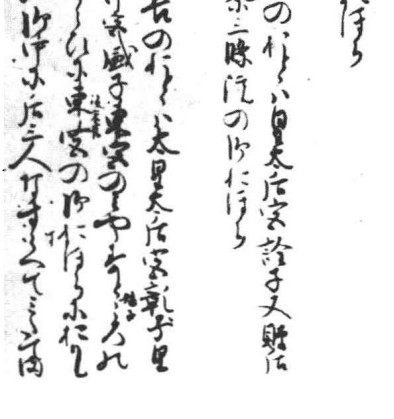
兼好を乱世の知識人などという、まことに通りのいい呼び名の下に、なんとなくわかったような顔ができる御時世らしいが、はたして彼自身がおのれの時代を乱世と考えていたかどうか。本当に乱世と思うひとならば、それなりに身の処し方もあろうし、第一あれほど王朝文化にあくがれ、その故事来歴を丹念に記録することはなかったろう。

兼好にとって、いまの世が乱世であるか、ないかというさかしげな判断よりも、今生の彼方になにを観ずべきかということが終始一貫した念頭事であったことは、まず、たしかだろう。でなければ、こういう果断な決意にみちた文章を書けるはずはない。

「万の事も、始終こそをかしけれ。男女の情も、ひとへに逢ひ見るをばいふものかは。逢はで止みにし憂さを思ひ、あだなる契をかこち、長き夜をひとり明し、遠き雲井を思ひやり、浅茅が宿に昔を偲ぶこそ、色好むとはいはめ」

冒頭に引いた「花はさかりに」にはじまる文章につづく、同じく第百三十七段の一節だが、さきにぼくが口にした『徒然草』の「美学」などという言葉は、ここへくると、もう一切無用である。唯美的というならば、これほど唯美的な「色好み」のすすめは、ほかに一寸考えられないだろう。だが、同時に、ここまで徹底して、「色好み」のもつ生活的な部分、いや、残滓を払い落そうとするならば、もうそれは唯美的とか、美学とかという言い方で表現できるものではない。むしろ、生活そのものという方がずっと事実に即するのではないか。生活の芸術化という現代風の説明の仕方も思いつかないではないが、それでは、まだ生ぬるい。ぼくがさきほどから実行という言葉をくりかえしているのも、実はこの一事にほかならない。

うまく説明してみてどうなるものでもないが、宣長のように、芸術は芸術、生活は生活と、一応は峻別すべき事柄



「大鏡」写本。池田亀鑑博士蔵。

「とわずがたり」の舞台六条長講堂。京都・下京区にある。

だとかたく信じている古典主義者には到底許しがたい事態であることは当然の筋道であった。しかも、彼の古典主義は本質においてのみそうなので、表出の局面においては逆にロマンティックなあくがれの噴出を旨とした。そして、その彼が身も魂もふるいおこしてあくがれたのが『源氏物語』の王朝文学だったことは、ますます、兼好法師にとって不運な巡り合せになった。王朝の色好みだって始めもあれば、終りもある。だが、始めは始めにすぎず、終りは終りでしかない。中こそが色の色たるあわれだと王朝人はだれしも応えただろう。

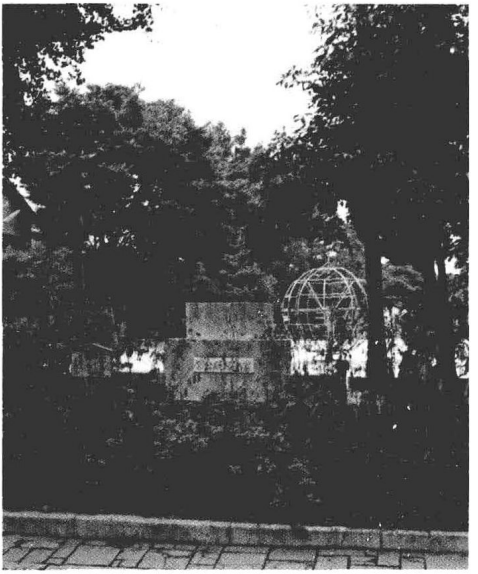
II

『徒然草』よりは、ほんの少しだけ早いが、やはり十四世紀初頭に書かれた後深草院二条の『とはずがたり』は平安以来の、かがやかしい宮廷女流の日記文学の系列につらなるおそらく最後の傑作であろう。どちらかといえば没落貴族の家柄に生まれた二条は若くして後深草上皇の寵を受ける運命にあったが、すでに当時、彼女には思うひとがあった。「手の曙」と彼女がよぶ男だが、これが西園寺実兼として、のちには鎌倉幕府とも気脈を通じ、宮廷随一の権力をふるうことになる、したたかな政治家の若き日の姿だった　上皇の寵は、彼女が十四歳から、ほぼ二十六歳まで、十二年の長きにおよぶが、この最後のあたりに、もうひとりの思う人、いや、彼女を思うひとが現われる。有明の阿闍梨と名のる高僧だが、もちろん、宮廷に自由に出入できる由緒ある身分のひとで、今日の学説では、後深草上皇の異腹の弟、性助法親王だということに大体意見が一致しているようだ。

相手が出家の身にあるひとだけに、そして、彼女自身も

京都・上京区の持明院（現在、光照院門跡）。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com



京都・嵯峨の大覚寺寝殿。大覚寺も、持明院も「とわずがたり」の舞台となったところだが、丁度この時代が南北朝時代（太平記の時代）の争乱の原因の一つである、大覚寺統と持明院統分裂のはじまりであることは「とわずがたり」本文でも明らかである。

京都・中京区二条にのこる富小路御所跡の碑。現在は公園となっている。

年を経ているだけに、この阿闍梨との交情の深切さは並大抵のものではない。人目をしのぶ劇的なスリルもさまざまあり、上皇自身がふたりの仲をもつというアンチ・クライマックスによって、このふたりの劇は一応表面的には落着したかにみえるが、少くとも、二条自身の内面においては、到底消えることもなく、また薄らぐこともない重い、重い澱みをのこすことになった。おのが業の深さを知るとは、だれしも生涯に一度や二度は口にしてみるものだが、思うひとの子をふたりまで生み、当の阿闍梨も疫病のためにはかなく世を去る弘安四年当時、『とはずがたり』の作者がみずからの業の深さをどのように感じとっていただろうか。

弘安四年といえば、この年の五月には元兵が壹岐を侵し、翌月には大宰府を犯している。そのあとで、いわゆる神風が吹くのだが、そんな気配はこの日記のどこにも読みとれはしない。たしか、そのまえの文永の役の頃だと思うが、亀山天皇が蒙古の難を避けるための法会を行ったということが、日常のごくありふれた噂話のように、ほんのちらりと記されているだけだが、これをしも『とはずがたり』の作者に責を負わすいわれはないのである。日記は、もちろん、個人の内面の記録である以上、作者の内面に関りのないことを書きしるす必要はいささかもない。二条の内面とは、すなわち、上皇と「雪の曙」と阿闍梨の三人の男性とのあいだに交わされる恋情の世界で、それ以上のものでもなければ、それ以下のものでもない。

愛欲の世界とも、また、中世宮廷のただれきった男女関係とも、言いだせば、いくらでもその種の言いまわしは思いつくが、所詮、それらはすべて今日のセンセーショナリズムが言わせるだけのことである。本当にそういうことが知りたければ、無味乾燥な厖大な資料を相手に徹底した思

考を働かした歴史家が、あらためてこの日記を読んだうえで判断すればいいことで、いま『とはずがたり』一篇を読んで、その率直な印象を口にせよともとめられるならば、まず第一に、ここには愛欲のすさまじさも、男女のただれのおぞましさもないということをはっきり言っておきたい。

それならばなにがあるか。静けさがある。その静けさは、あのかつての生々しい交情のありかを回想するための場として、あるいは、その回想をかきたてるための促進剤としての静けさといってもいいが、もう少し実地について説明しなくてはならぬ。

「つら〳〵古を顧みれば、二歳の年母には別れければその面影を知らず。やうやう人となりて、四つになりし長月廿日余りにや、仙洞に知られ奉りて、御簡の列に連りてより以来、辱けなく君の恩言を承りて、身を立つるはかりごとをも知り、朝恩をも被りて、数多の年月を経しかば、一門の光ともなりもやすると、心の内のあらましも、などか思ひ寄らざるべきなれども、棄てて無為に入る習ひ、定まれる世の理なれば、妻子珍宝及王位、臨命終時不随者、思ひ捨てにし憂き世ぞかしと思へども、慣れ来し宮の内も恋しく、折々の御情も忘られ奉らねば、事の便りには、まづ言問ふ袖の涙のみぞ色深く侍る。

雪さへかきくらし降り積れば、眺めの末さへ道絶え果つる心地して、眺めゐたるに、主の尼君が方より、『雪の中如何に』と申したりしかば、

思ひやれ憂きこと積る白雪の
跡なき庭に消えかへる身を

問ふに辛さの涙もろさも、人目怪しければ、忍びて、又年も返りぬ」

三十の年をこして、まもなく宮中から退いた二条は出家し、尼姿で鎌倉に旅立つ。なんのための東下りだったか、学者のあいだでいろいろ詮議のあるところだが、善光寺詣りがその目的の主要なものであったと考えてよろしいだろう。ここに引用した一節は鎌倉滞在を切り上げて、信濃へ向う旅すがら、とりあえず入間川のほとり、川口に宿る件りである。

来し方をかえりみ、この世を思い捨てた行く末に心をこらしながらも、なおかつ、むかしの人を忘れぬ心をもてあましている作者の内面が、いささか定石通りに書かれているが、それだから、彼女の心のありようは、そのかぎりにおいて、実にくっきりうかびあがる。わずかな青みをのこし

京都・南区にある稲荷明神の寛算石。「大鏡」の舞台である。

て、むらなく澄みわたった秋の空を思わせる内面のひろがりがあって、そこには白い雲のかたまりひとつ見当らない。

二条は同時代の宮廷人と同じく、涙もろい女だが、彼女の場合、いや、彼女が一時仕え、もしかしたら彼女の娘だったかもしれない、あの永福門院もそうだったが、もはや涙川といった、あのはげしい美しさにあふれた日本語は要なきものだった。もちろん、未練のあさましさなど『とはずがたり』全篇を通じてどこにもない。だから、いま引用した文章は、かならずしも、この川口の件りでなくても、もっとあとの件り、あるいは、まえの部分、さらに冒頭におかれていても少しもおかしくはないのである。つまり、二条の生涯は、宮廷の内外いずれにおいても、見方ひとつできわめて劇的な事件を含み、さらにより劇的な心理の動きがあったはずである。その気になれば、このうえもなく悲痛な心理劇をつくることも、また、大仕掛な宮廷劇となったものをしつらえることも可能だろう。

「大鏡」の舞台、京都の吉田神社。

だが、『とはずがたり』の作者は劇的なものすべてに目もくれない。ここには時間は流れない。ひとはきたり、ひとは去り、風景のかたちもかげろいもさまざまに変化してゆくけれども、それらはみな、おのれの涙もろさを忍びながら、二条が心をこらして磨きあげた女面の鏡の外をさまよう、うつろなるものの似姿にすぎない。その姿はそれなりのおかしみも、また、意味合いもあろうけれども、かりそめにも『とはずがたり』を文学作品として読もうとするならば、まず、この鏡の、たえてかわらぬ輝きの美しさを感得することが必要だろう。そうすれば、宮中退出、そして出家を境に、この手記の内容は二分されたかのようにみえるけれども、そういう区別はほとんど意味がなく、むしろ、東へ、あるいは西へと旅の日をくりかえした二条のせわしいない後半生も、また、『とはずがたり』を生みだした不磨の内面鏡の光りをいやましによぶための必然の道行だったことがおのずと理解されるだろう。

一切の劇を遮断した無時間の内面を支配するのは静けさである。だが、それは沈黙とはちがう。音はたえずきこえるのである。いや、この静けさは、むしろ聴覚的というよりは視覚的なものへと向う。淡々しく澄みわたった空の色。そう、色なのである。まさしく『とはずがたり』全篇の主導音は「事の便りには、まづ言問ふ袖の涙のみぞ色深く侍る」の一句にみごとに収斂されるといっても過言の譏りは招くまい。いや、主導音というべきではあるまい。ここには鳴りひびく和音の豊かさはなく、この一句にもとづいてつくられたセリー形式を思わせる微妙にして、厳格な十二音の世界がかぎりなくひそやかな悲しみの唱を始めも

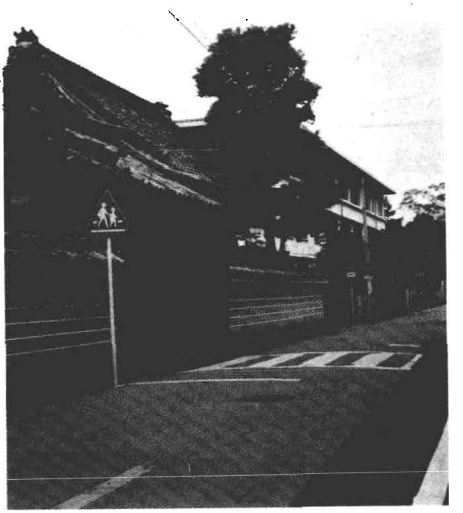
終りもなく――ということは、すなわち劇的起伏がありえないために、かりそめの始めと終りしかないと言い直してもいいが――うたいつづけ、それにつれて二条の内面鏡からは鈍色のかがやきが優しく、冷ややかに放射しつづけているのである。

色深く侍る――この日本語を今日のわれわれはどのように感受し、どう理解すればいいのか。色といっても、もはや、それはかつての外にあらわれる物象の美を表わすものでないことはたしかだろう。内面にかかわるもの、辞典風にいえば、情趣、情感といったもの、それを経験するものの立場に即して、はじめて成り立つ言葉だろう。だが、かならずしもそれだけとも思えない。「色深く侍る」と敬語の止めがつくとき、一度即した主観も、ややくずれ、その主観を、さらにひとつの客体としてとらえるだけの冷ややかさがうっすらとたちこめる。

かつて鎌倉幕府が居を構えた鎌倉・大蔵ヶ谷の一隅。「とわずがたり」の女主人公・二条が尼となって訪れたのもこのあたりであろうか。

言葉の構造に従って説明すれば、筋道の順序はこういう風になるけれども、熱っぽい情趣、情感がまず燃えあがり、そのあとで冷ややかな眼ざしがそれをみつめるというのではない。「色深く侍る」という言葉が一息で口にすべきものである以上、あつい思いの心と冷ややかな眼ざしは同時にうごく。こういう心と眼ざしの持主に幻滅の悲哀は到底生れえない。幻滅することを奪われたひとの心こそ、まさに『とはずがたり』の内面のかがやきの魅力にほかならない。

だが、悲哀感は依然としてのこる。悲哀というよりは、もっと痛切な感情が、ふとしたはずみで、思いもかけないようなところから地下水のように噴きあげてくる。たとえば、巻三に北山准后九十の賀を祝う件りがことこまかに記されている。宮廷人のすべてが目もあざやかな衣裳に身をかざり、遠いむかしから伝えられ、守られぬいてきた雅び



京都・上京区にのこる法成寺趾。「大鏡」の主人公・藤原道長により創建され、その栄華は「大鏡」「徒然草」に記されているが、のち廃絶された。「たとえば藤原道長の京極殿や法成寺などを見ると、昔の志だけは残って時勢が一変しているのに注意を促されて胸の迫る思いがある……」（「徒然草」第二五段）

京都・北区紫野の雲林院境内。「大鏡」の全物語りが語られる舞台であるが、当時の雲林院は実際には、この現在所の向いにある大徳寺の場所にあった。「先日、紫野にある雲林院の菩提講に参詣したところ、その聴聞に集まった人々の中に、普通の人よりも数段年老いて、異様な感じのする老翁二人と、老媼が来合わせて、一カ所に坐をしめた」（「大鏡」冒頭の部分である）

事をあくことなくつづける。丹念に記録された、行事のかずかずを表わす漢字の字面を追うだけで、ここには、いとも優なる、いとも婉なる世界がくりひろげられているのがまざまざと目のまえに現前する。これこそ文明の極致と讃えたくもなるし、また、現に、字面を通して、その細目をぼく自身の精一杯の想像力を働かして、おのが視覚と聴覚によって再現してみるとき、居ても立ってもいられない気がするのは、掛け値なしのぼくの気持だが、同時に、ぼくの心のなかに、一瞬、なにかやりきれない悲痛な思いが押寄せてくるのも、また、このときなのだ。

二度とかえらぬものをみずからあくがれることの空しさ——いや、それとはちがう。ぼくとても歴史の展望は貧しいながらもっている。ぼく自身のことではない。この祝宴に参加しているひとたちのことである。彼らの心事のほどはわからない。また、それを忖度するいわれも手立てもない。事は祝宴そのものなのだ。ホモ・ルーデンスの悲しみというか、人間はこれほどまでにしておのれの遊戯を厳粛かつ洗練したものにせねばならないものだろうかという感銘であり、その思いが、ぼくを深く悲しませる。

Ⅲ

同じ宮廷文化といいながら、この弘安の頃より三百年ちかくもむかし、まだ摂関政治華やかなりし頃、文化の様態はこんな厳粛な形式主義を許しはしなかった。『大鏡』の作者がえがく道長の行状は、たとえば、こうである。

「をりをりにつけたる御かたちなど、げに長き思ひ出でとこそは人申すめれ。中にも三条院の御時、賀茂行幸の日、雪ことのほかにいたう降りしかば、御ひとへの袖をひき出でて、御扇を高く持たせたまへるに、いと白く降りかかり

当時（「大鏡」成立当時）雲林院が実際にあった大徳寺の山門。

たれば、道長『あないみじ』とて、うち払はせたまへりし御もてなしは、いとめでたくおはしましし ものかな。上の御衣は黒きに、御ひとへ衣は紅のはなやかなるあはひに、雪の色ももてはやされて、えもいへずおはしましし ものかな。高名の何がしといひし御馬、いみじかりし悪馬なり。あはれ、それを奉りしづめたりしはや。三条院を、その日の事をこそ思し出でおはしますなれ。御病のうちにも、三条『賀茂行幸の白の雪こそ忘れがたけれ』と、仰せられけむこそあはれにはべれ」

道長の闊達な人柄が生き生きしている逸話で、やはりこういう人物だからこそあの摂関政治の花形役者として、人の上にも立ち、また、王朝文化の極盛時を生みだすことができたんだなあとあらためて感嘆もし、納得もゆく。『大鏡』の作者が、だれか分らないが、元永二年前後の成立といいから十二世紀初頭、白河法皇の院政時代である。道長の当時から一世紀の距りがあるにもかかわらず、道長を語る『大鏡』の作者の口調はいかにもなつかしげである。

作者が藤原氏縁故のひとであることは容易に察しがつくにしても、こんなに親しげな気持で道長の行蹟を語り、それがおのが眷族の身びいきといったさもしさがなく、ひとつの文化の総体にかかわる象徴的表現にまで高まっているということは、道長在世の当時と、『大鏡』執筆の時代とが文化的に等質で、つまり、その間にこだわるべき変質や乖離がなかったということである。政治権力の保持者は藤原氏から法皇へと移行していたにもかかわらず、文化そのもののあり方は前代の遺産をすなおに継承発展すればよかった。兼好法師が、一世紀まえの『新古今』の歌に首をかしげるといった、心許ない姿勢は『大鏡』の作者のものではなかった。

いわゆる鏡物の筆頭を占める、この作品は、シナ正史の紀伝体とわが旧辞文学の骨法を複雑にまじりあわせた構成をとり、専門家のあいだではいろいろむずかしく厄介な論議がたたかわされているようだが、そういう問題はここでは論外として、率直にいえば、この『大鏡』の読みどころは、なんといっても、太政大臣道長の件りであろう。はじめの時平のところなども、菅原の大臣、すなわち道真公の行蹟が時平のそれをおおうほどに物語られているし、また、伊尹の件りでは冷泉院、花山院父子二代にわたる狂態のさまが読者をおどろかして、決してはえばえした話題ばかりではないが、それにもかかわらず、『大鏡』がほかの鏡物にくらべて断然抜きんでているのは、道長に代表される寛闊な時代の優雅さの光輝を作者がおのが心のなかで無理なくおのずとよびおこし、藤氏の栄誉を天下のそれとして語って

「方丈記」の作者・鴨長明の画像。作者不明。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com